

〈論文〉

共同研究〈諸言語圏・諸文化圏における「花」〉  
16世紀にトウルスィーダースが詠った  
叙事詩『ラーマの行いの湖』で  
天から降る花

— 誰がどのようなときに 誰に 花を降らせたのか —

坂田 貞二

Abstract

In *Rāmcaritmānas* created by Tulsīdās in the 16th century in Awadhi dialect of Hindi language, we often come across the cases in which flowers were fallen from the heaven by the gods or godly persons. Representative cases will be cited in this paper from the text of *Rāmcaritmānas* published by Gītā Press in 1961.

Most of the flowers were blossomed and fallen by the gods or godly persons to celebrate the people who worked marvelously. One case is cited below from the scene in which Rāma came home happily after a long stay in a wood (VII-8 kha):

*The flowers were falling to celebrate home coming of Rāma,  
People of the capital were happy to watch him going to his castle.*

But the text gives no description of the flowers falling or gods who caused to fall them. The reasons may be that the Hindus can imagine the flowers and gods without minute description of them.

キーワード：『ラーマの行いの湖』, 花, 神々, 優れた人々, 人々を祝福

## I はじめに：本稿の目的・構成など

本稿は、ヒンディー語のアワディー方言でトゥルスィーダースが16世紀に詠ったラーマ物語 *Rāmcāritmānas* (『ラーマの行いの湖』) のなかで、誰がどのようなときに誰に「花」を降らせたのかを考察するものである。

この論文は、拓殖大学名誉教授の村上祥子先生主宰のもとに行われていた2019年度の共同研究〈諸言語圏・諸文化圏における「花」〉の一環として書かれたものである。なおこの共同研究の成果発表の最初がこの論文であり、他はいま研究中である。

以下では、このラーマ物語を邦訳題の『ラーマの行いの湖』で示すことが多い。

この物語の全編は、ラーマが羅刹ラーヴァナに勝利したことを祝うヴィジャヤ・ダシャミー祭(勝利・アーシュヴィン月の白半月土日の祭り)を中心とする秋に、北インドの町や村で唱読されることが多い。また個人の家で男子の誕生日を中心に、全編が唱読されることもある。

*Rāmcāritmānas* (『ラーマの行いの湖』) は、西暦1574年にアヨーディヤーで着手され、数年後にカーシー(現在のワラーナシー)で完成されたといわれているが、完成の時は確実にわかってはいない。

物語の詳細は、チャウパーイー4句で描写されるのが原則である。チャウパーイー1句は依拠したテキストで2行に印刷されている。それで邦訳するさいも、チャウパーイー1句を2行にする。つまり原本と邦訳で、原則的に2行×4チャウパーイー=8行で物語の詳細を描写するわけである。

それに続いて物語の動きが、2行連句のドーハーによって語られている。これも原本の印刷と邦訳で2行に記されている。

このように『ラーマの行いの湖』は、4連のチャウパーイー(8行)で

物語りの詳細を描写したあと、1連のドーハー（2行）で物語の動きを示している。つまり8行と2行を合わせた10行が一つの単位になっているのである。

基本的には10行の単位1,074個により、I編からVII編までのこのラーマ物語が展開されている。

一つの単位の例を、下に示す。2行に邦訳されたチャウパーイーが4連（8行）のあとに1連のドーハー（2行）があり、合計で10行になっていることがここに見てとれよう。なお末尾にくるドーハーを、邦訳では**太字**で示してある。そのなかで特に強調したい部分は、**太字の斜体**で表わす。

場面は第I編の「幼年編」で、シヴァ神の剛弓を折ったラーマ王子がジャナカ王の姫スーターが勝利の花環をかけ、「あなたこそわたしのお婿さんになるのに相応しい方です」とみなに宣言するところである。

胞輩のなかでスーター姫はいと麗し 群なす美の大美さながら。  
姫の手の花環が心地よく 世界の勝者の美がそこに秘められる。

心に熱意あれども羞恥の念も 秘められた姫の愛は誰にもわからぬ。  
ラーマの美に目を奪われ 姫は絵に描かれたごとく動けずに立つ。

そのさまに気づき朋が姫にいう 麗しき花環を王子さまに掛けませと。  
姫は両の手に花環を 愛にひたる姫は王子に花環を掛けられず。

蓮花さながらの姫の両の手 蓮花のごとき手は月より麗し。  
魅せられて胞輩が唄うなか 姫は勇者の胸に勝利の花環を掛ける。

ラグ族の勇者の胸に輝く花環を見て、**神々は数多の花を降らせはじめる**、  
弓取り式に來た王らは、**太陽に照らされた睡蓮さながらに縮こまる**。

『ラーマの行いの湖』は第Ⅰ編から第Ⅶ編まで全七編の叙事詩から成っている。七編の題および各編に収められた10行の単位（チャウパーイー8行とドーハー2行）の内訳は下記の通りである。

第Ⅰ編 = Bālakāṇḍa（幼年編），361 ドーハー。

第Ⅱ編 = Ayodhyākāṇḍa（アヨーディヤー編），326 ドーハー。

第Ⅲ編 = Aranyakāṇḍa（森林編），46 ドーハー。

第Ⅳ編 = Kiṣkindhākāṇḍa（猿国編），30 ドーハー。

第Ⅴ編 = Sundarakāṇḍa（美麗編），60 ドーハー。

第Ⅵ編 = Laṅkākaṇḍa（ランカー編），121 ドーハー。

第Ⅶ編 = Uttarakāṇḍa（後編），130 ドーハー。

本稿をつぎの手順で進める。

I 「花」を示すヒンディー語を，辞典と『ラーマの行いの湖』によって知る。

II 「花」と「神」がどのようなときに現われるかを，『ラーマの行いの湖』の(1)から(16)により知る（実際にはその部分の邦訳を掲げる）。

III 「花」が誰により降らされかに注目して，

- A. 神々だけが花を降らせる場面
- B. 神々・半神・聖仙らが花を降らせる場面
- C. 普通の人間が花を降らせる場面

を見てゆく。

そのうえでIIの(1)から(16)のなかから，誰がどのような場面で誰に花を降りかけたかを明らかにする。

IV 以上に基づいて，

A. どのような花が降ってきたのか

B. 神々はどのような姿なのか

を検討する。

V 本稿の成果を確認し、今後に残された課題を考える。

日本語⇒ヒンディー語の辞典の代表的なものに、つぎがある。

- ・古賀勝郎『日本語——ヒンディー語辞典』（私家版，1996年刊）。
- ・町田和彦『ヒンディー語・日本語辞典：付：日本語・ヒンディー語小辞典』（三省堂，2016年刊）。

本稿ではヒンディー語の語句を示すにあたり、一般的にそれを表記するナーガリー文字は使わず、ローマ字に点や長母音記号をつけたものを使う。なおこれらの辞典には関連のウルドゥー語の語彙も挙げられているが、それらはトゥルスィーダースが詠ったラーマ物語『ラーマの行いの湖』に取りあげられることが少ないないので、本稿では無視する。

「花」は上記の日本語⇒ヒンディー語辞典に、 *phūla*, *puṣpa*, *gula* の三語が掲げられている。これらのうちこのラーマ物語では、*phūla* の語が頻繁に用いられている。

上記の辞典には載っていないが、16世紀のトゥルスィーダースが詠ったラーマ物語では「花」の語が下掲の二つの形でも用いられている。

- ・ *phūlā*（語末の短母音 *a* が長母音 *ā* になったもの。これは韻文作品の拍を合わせるために用いられている）。
- ・ *sumana*（もとは形容詞の「美しい」だが、転じて名詞で「花（特にジャスミンの花）、神」を表わす）。

『ラーマの行いの湖』にどのような語がどこで用いられているかは、Callewaertら編の *Word Index*（『ラーマの行いの湖 語彙索引』）に示されている。その『語彙索引』は、拙稿「ヒンディー文学における“呪い”と“予

言・夢”」（2018年12月刊の『拓殖大学 語学研究』139号, pp.29-50）でも参照した。『語彙索引』が『ラーマの行いの湖』の主要な語彙について、取りこぼしがなく完全であることを筆者はそこで確認したからである。

日本語⇒ヒンディー語辞典と『ラーマの行いの湖』に載せられた語をよく見ると、花を表わすのに *sumana* という語が第Ⅰ編から第Ⅶ編までの全体にわたって使われている。一方で *phūla*, *phūlā*, *puṣpa* の類は、用いられる場面と編が限られている。これらのことは、W. M. Callewaert & P. Lutgendorf の『語彙索引』によっても明らかなので、本稿では *phūla*, *phūlā*, *puṣpa*, *gula* がどのように取りあげられているかは論ぜず、*sumana* (花) が『ラーマの行いの湖』において誰により どのようなときに、誰に対して降り注がれたのかを考察する。

## Ⅱ 『ラーマの行いの湖』において *sumana* (花) が降らされる主要例

『ラーマの行いの湖』全編で *sumana* (花) が詠われる場面は70ほどあるが、そのなかから花の降らし手、降らされる人、降らされる状況などに重複が少ないよう、16の場面を選んで以下に示す。なおそのさい、花の降る場面を邦訳し、その原文の位置を示すために( )内に編-ドーハー；チャウパーイーなどの番号を記す。

場面には(1)～(16)の通し番号をつける。

第Ⅰ編「幼年編」からは、(1)から(5)までの場面を採りあげる。

- (1) まずラーマら四王子の誕生について、「太陽と月の位置・星宿や日にち、すべてが見事に整いて、みなが喜悅するなかで、幸いもたらずラーマが生誕 (I-190)」とされている。こうしてラーマ王子は、父ダシャラタ王と母カウシャルヤー妃から生れた。ダシャラタ王に

はほかに二人の妃がいて、間もなくカイケーイー妃からバラタ王子が、スミトラー妃からラクシュマナ王子とシャトゥルグナ王子が生まれた。

それを祝い ナーガ・聖仙・神々が天に行く船に乗り、花をみなに降らせる：

美しき掌から花を降らせる 空で太鼓の音が鳴りひびく。

ナーガ \*nāga と聖仙 \*\*muni と神 \*\*\*deva が祝う 各人の仕方です。

\* ナーガ。人面蛇身の半神。 \*\* 聖仙。思考と苦業を重ねた人。

\*\*\* 神。天界にいて不死の存在。 (I-191; 4)

そのときのラーマ王子はこう描かれている、「目を喜ばす雲のごとき黒き肌で、四本の腕に武器を持ち、宝飾と首飾りで身を包み、**kharārī**（ヴィシュヌ神の化身ラーマ）が顕現す (I-192-chanda 1)」。

なお“kharārī”は古賀勝郎・高橋 明（編）『ヒンディー語——日本語辞典』（大修館書店、2006年刊）では“kharārī”の見出し語で、「ヴィシュヌ神、ラーマ、クリシュナ、バララーマ」とされている。

(2) それから何年か経って、師のヴィシュヴァーミトラ仙がダシャラタ王に「羅刹たちの妨害から儀礼を行うのを護らせるために、ラーマとラクシュマナの二王子をわたしに預けてください」と懇請する。王ははじめのうち、幼い王子らを手許から放すことに躊躇いを感じていた。しかしついに「王は王子らを仙人に委ね、祝いの言葉を王子らにかける、ラーマは母のもとに赴き、暇を乞いて御足を戴く (I-208 kha)」のである。師とともに行く二人の王子を、女性らが花を降らせてこう祝う。

美しい顔と眼の女性ら sulocani\* は喜び、花を降らせける、

王子兄弟が行く先々で、このうえのない喜びが湧く。(I-223)

\*美しい眼の女性ら sulocani。sulocani は、su（美しい、立派な）と

locani (眼の女性) の複合語。

- (3) 師に導かれてジャナカ王の国にやってきたラーマ王子は、弓取り式の中で「弓を二つに折り大地に投げる (I-262; 1 の一行目の前半)」。そして**創造神ら・行者ら・聖仙らが花や花環を降らせ、ラーマを祝福する**場面が詠われている：

創造神 brahmā\* と行者 siddha\*\* と聖仙が ラーマを讃えて祝う。  
色とりどりの花と花環を降らせ 楽士らが祝い歌を詠う。

\*創造神。世界の根本原理で最高の存在。

\*\*行者。修行により超能力を身につけた人、神仙。 (I-262; 3)

- (4) 弓取り式で勝利したラーマ王子とジャナカ王の娘スイーター姫が結婚したのを見て、ラーマらの父ダシャラタ王とスイーターらの父ジャナカ王は、喜び親しむ。二人の王が親しむのを見て**神々は、こう祝う**：

二人の王が親しむさまに 神々 deva は花を降らせ歌を詠う。

(I-320; 2 の二行目)

- (5) 四人の花婿は、それぞれの花嫁を連れてアヨーディヤーの都に戻る。カウシャルヤー妃とカイケーイー妃とスミトラー妃がわが子と花嫁を出迎えるさまは、つぎのように描写されている：「**金のお皿に乗せた祝いの品々を、母らは蓮花のような美しい手に持ち、喜びに溢れ歓迎する、身体は喜悦で震えながら** (I-346)。」それに続くチャウパーイーに、**神々が降らす花**がつぎのように詠われている：

土の埃で空は暗い まるで雨期に雲が空を覆えるがごとく。

神々は如意樹 surataru\* の花を降らす 風に吹かれた鶴のように。

\*如意樹。文字通りには「天の樹」。あらゆる望みを叶えてくれる樹。

(I-347; 1)

- こうして神々が、如意樹の花を**花婿たちと花嫁たちや都の人ら**にかけて、**一行の帰還を祝ってくれる**のであろう。



なお以降は、花を降らせる主体の原文の綴りがすでに示されている事例については、重複を避けるためにそれらの綴りを示さないことを原則とする。

第Ⅱ編「アヨーディヤー編」は、実質的にラーマ王子の「皇太子即位の礼」の準備ではじまる。年老いた父ダシャラタ王がラーマを皇太子に即位させ、のちに王位に就かせようと準備をはじめた（Ⅱ-4）。それを聞いたカイケーイー妃は、侍女に騙され自分の子のバラタ王子をその位に就けようと「怒りの部屋」に籠もり、ラーマを森に追いやるようにダシャラタ王に言う（Ⅱ-28）。王はカイケーイー妃に命を救われたときに「妃の望みは何でも叶える」と約束したので、ラーマを十四年のあいだ森に追いやらざるをえなくなる（Ⅱ-76）。

このような事情でラーマとその妃のスィーター、それに弟のラクシュマナの一行は都を離れて森に行く。そのあとの場面三つ＝通し番号では（6）～（8）＝を第Ⅱ編から掲げる。

- （6） ラーマは妻スィーター妃と弟ラクシュマナを連れて森に向かう。一行は聖河ガンガーの畔に着き、ラーマが舟に乗ろうとすると、**神々は舟人を祝する：**

舟人はラーマへの愛に溢れる ラーマの御足を川の水で洗う。  
神々は舟人に花を降らす ラーマらを舟に乗せる幸運を得ると。  
(Ⅱ-101; 4)

ここでは**神々が舟人の幸運を祝って**花を降らせているのである。そのあとしばらくしてダシャラタ王は、ラーマが都にいないことを悲しみながら世を去り、神の世界に赴く。そのさまはこう詠われている：「ラーマ ラーマと、ラーマの名を呼び続け、都にラーマがいないのを悲しみつ、王は神の国に身罷れり（Ⅱ-155）。」

- （7） 自分の留守中に母カイケーイーが兄ラーマを森に追いやったと

知ったバラタは、「兄ラーマは国を治めてください」と懇請するために森に行く。バラタの**兄思いの気持ちを嘉（よみ）**するために**神々が花を降りかける**さまが、つぎのように詠われている：

バラタが歩むと神々が花を降らせ 樹木は花と実を成らせる。  
鹿はバラタを見つめ小鳥が歌う 皆がラーマ思いのバラタに仕う。  
(Ⅱ-311; 4)

森に訪ねてきたバラタに、ラーマは「いまは国に帰らないから、この履き物を王座に置いて国を治めなさい」といって自分の履き物を渡す（Ⅱ-316; 2）。バラタは「兄者ラーマが国に戻るまでそうします」と答える。

- (8) 「愛でいっばいのラーマは バラタの言と心と行いを描く」(Ⅱ-321; 3の一行目)と場面(7)の確認をした直後に、『ラーマの行いの湖』は**神々がラーマのさまに感動して**花を降らせたと詠っている：

ラーマのさまを見て神々は 花の雨を降りかける。(Ⅱ-321; 4の一行目)

第Ⅲ編「森林編」は全体が46のドーハーから成る短い編である。そのなかからつぎの一つの場面だけを示す。

- (9) ラーヴァナら羅刹たちがラーマたちを苦しめるために森にやってくるのを知ったラーマは、妃スイーターにこういって火の神に委ねる：「愛する者よ夫を大事にする若妻よ われはこれから遊戯をなす。なれを浄火の神のなかに住まわす われが羅刹らを亡ぼすまで(Ⅲ-24; 1)。」

こうして眼前の妃は幻影になったので、ラーマの留守中に妃がラーヴァナに攫われても、真の妃は汚されないのである。ラーマは**ほかにも善行をなしている**ので、**神々に花で祝福**される。

**神々はたくさん花を降らせ、ラーマを讃える歌を詠う、**

**自らを悪魔に拝ませるほどに、情が深きラーマなり。**（Ⅲ-27）

第Ⅳ編「猿国編」は全体が30のドーハーだけから成り、『ラーマの行いの湖』七編のなかで最も短い編である。なかからチャウパーイーの一行目だけを提示する。

(10) ラーマはスグリーヴァに花の輪をかけ かれに大きな力を与う。

(Ⅳ-8; 4の一行目)

この部分は、ラーマが猿王スグリーヴァに花の環 (sumana kai mālā) をかけて**力づける**という文脈であり、またラーマがランカーの羅刹ラーヴァナと戦うときに猿の軍勢の力を借りられる前提にもなっている。なおこの「猿国編」では花が sumana, phūla, phūlā のいずれの形でも降ることがないことが、Callewaert らによる『ラーマの行いの湖 語彙索引』の記述によって明かである。

第Ⅴ編「美麗編」は60ドーハーから成る。そこから一つのチャウパーイーを提示する。

(11) 攻撃を遅らせる理由はなし 猿の軍勢にラーマは命令されよ。

羅刹らを退治するとの志に 神々は花を降らせ神界に戻る。

(Ⅴ-34; 4)

ここでは、**神々がラーマに羅刹らを退治するとの志を賞讃して花を降らせるのである。**

第Ⅵ編の「ランカー編」は、121のドーハーから成る。そのなかから(12)～(14)の三つの場面に出てくる花を紹介する。

ラーヴァナを成敗し攫われたスイーター妃（の幻影）を救出するために、ラーマは猿の軍団とともに羅刹の島ランカーに攻めいる。そのさまは、「島に渡る橋が丈夫 それを見てラーマは喜ぶ。猿の軍勢が橋を渡ると

きに雄叫びを上げながら（VI-4; 1）と描写されている。

- (12) ラーマが羅刹ラーヴァナを成敗するさまは、つぎのように詠われる：「ラーヴァナの胴体が倒れて地が響き ラーマは矢を引きラーヴァナを裂く。死に際に羅刹は大声で ラーマを戦いで殺してやると言う（VI-103; 2）。」

その四チャウパーイー後に、神々と聖仙らがラーマとヴィシュヌ神を讃えてこう花を降らせる：

花を降らす神々と聖仙が 栄光あれとラーマとヴィシュヌ神に。

(VI-103; 6)

- (13) ラーマは妃のスイーターを「なれを浄火の神のなかに住まわす われが羅刹らを亡ぼすまで（Ⅲ-24; 1）」といて火神に委ねた（前述の第Ⅲ編の「森林編」（9）を参照）。この「ランカー編」でラーマがラーヴァナを倒したことは前項の(12)に述べた。そしてスイーター妃を救出するのだが、救出されたスイーター妃がいかにして火神の手からラーマに戻されるのかは、つぎのように描写されている：

夫の君ラーマを想いつつ、シヴァ神に拝されスイーター妃、  
コーサラ国のラーマに光栄あれと、白檀のごとき火神に入る。  
世俗の汚れみなが、火に燃えつきて清浄になる、  
ラーマの遊戯は誰にもわからぬ、天の神々や地の聖賢らにも。

(VI-109; chanda 1)

このことを祝して神々が花を天から降らすさまがこう描かれている：

神々は喜び花を降らせ、空で太鼓を撃ち鳴らす、  
楽士たちが詠う、神女 surabadhū\* が天の船で舞う。

(VI-109 ka)

\* 神女。原文通りには「神の妻」。神の配偶者または女神を指す。

ここで神々から花を降らされたのは、うえに訳出したドーハーに詠われ

ていないが、火神に妃スィーターを委ねたラーマ、火神の懐に入ったスィーター妃、それに災悪からみなを護る火神であろう。

- (14) ラーヴァナを成敗し解脱させたラーマは、こうも祝われる：  
「ラーマのごとき情の深き者はほかになし 羅刹らをみな解脱さす。  
悪と罪の根源のラーヴァナをも 世事から解放し解脱さす（VI-114 ka; 5）。」その直後のドーハーで、天の船に乗った神々がラーマを讃え花を降らすさまが描かれている：

**見事な船に乗りし神々は、花を降らせその場を去る、  
好機が来たとシヴァ神は、ラーマに近寄りかくいえり。**

(VI-114 ka)

第Ⅶ編の「後編」は、130のドーハーから成り、この長大なラーマ物語を締めくくる。この第Ⅶ編には「花」sumana が降らされる例は二箇所のみである。

しかしこの編はこのラーマ物語全体の結びともなっているので、「花が降らされる」ことに触れていない場面からも、筋の展開を示すうえで重要な何カ所かを紹介する。

- (15) アヨーディヤーの都に天に行く船に乗って凱旋したラーマ一行は、都の人々の大歓迎を受ける。そのとき花が降りそそぐ：

**空から花が降りそそぐなか、喜びに満ちてラーマが館に向かう、  
都の男女は家の高き階から、そのさまをじっと見つめる。**

(VII-8 kha)

ここでは空から神々がラーマの凱旋を祝して花を降りそそいでいるのであろう。

- (16) もう一つはチャウパーイーで、神々が花を降らせる。

アワドの都は美しく飾られ 神々が花をたくさん降らせる。  
ラーマは従者を呼んで言いつける まずは朋を沐浴させよと。

(VII-11; 1)

ここでは神々が、ラーマを含めたアワドの都の人々を祝福して花を降らせているのだろう。

花は降りそそがれず神々も登場しないが、この編で大切な場面・できごと三つを挙げておこう。

ラーマが亡きダシャラタ王の王位を継いだ場面は、こう記されている：

**冠を戴き腕飾りなど宝飾をつけ、身の隅々まで飾りしラーマ王、  
蓮のごとく美しき目に広い胸と太い腕、観る者みなが幸せに。**

(VII-12 ka; Chanda 2 の後半)

ラーマが治めるようになった国の状況は、次のように詠われている：

ラーマの治世が及ぶ天・空・地の三界は 喜びに満ち苦が消える。  
誰一人として敵意を持つ者なく ラーマの栄光で心に差別なし。

(VII-20; 4)

ラーマ王とスィーター妃に子らが授かる場面は、こう記されている：

二人の王子をスィーター妃が産む ラヴァ王子とクシャ王子を。

(VII-25; 3 の二行目)

都に還ったスィーター妃が、宮廷にいてラーマとのあいだに二人の王子を授かるとするこの部分は、ヴァールミーキによる古代の『ラーマヤナ』と大いに異なる。ヴァールミーキ版でラーヴァナに攫われたのはスィーター妃そのものであったから、攫われていたあいだに彼女がラーヴァナに汚されていた可能性もあった(ヴァールミーキ版のⅢ-49-40)。だから彼女は都にいられなくなり、土に呑まれたのである(VII-97-21)。ところが『ラーマの行いの湖』では第Ⅲ編の「森林編」で述べたように、スィーター妃はラーマによって火神に委ねられ、羅刹ラーヴァナに攫われ

たのは幻影のスイーターであったから（Ⅲ-24; 1），真のスイーター妃がラーヴァナに汚されるはずがなく，彼女は宮廷で二人の王子を生みえたのである。

この16世紀のラーマ物語は，古代のヴァールミーキ版に比べると平和裏に終末を迎えられるように構成されていることが，この一事からもわからう。

『ラーマの行いの湖』の全編が，毎年秋にラーム・リーラーという劇で演じられている。それは北インドの民が，平和裏に終結するこのラーマ物語の上演を望んでいるからであろう。

### Ⅲ 「花」が誰により，どのような場面で，誰に対して降り注がれたのか

『ラーマの行いの湖』で花は，多くの場合に神々が立派な行為をした人間たちに降らす。

上掲の(1)から(16)を見ながら，まずは「A. 神々だけが花を降らせる場面」を抽出する。つぎに「B. 神々・半神・聖仙らが花を降らせる場面」を抽出する。そして最後に「C. 人間が花を降らせる場面」の事例を示す。

#### A. 神々だけが花を降らせる場面

(4) 幸せに結婚した王子と王女を見て，ラーマらの父ダシャラタ王とスイーターらの父ジャナカ王の二人が親しむさまを，神々は花を降らせて祝う：

二人の王が親しむさまに 神々は花を降らせ歌を詠う。

(I-320; 2の二行目)

(5) 神々が如意樹の花を花婿たち・花嫁たちや都の人みなに降らす：  
土の埃で空は暗い まるで雨期に雲が空を覆えるがごとく。

神々は如意樹の花を降らす 風に吹かれた鶴のように。

(I-347; 1)

- (6) ラーマら一行が森に向かう途中で聖河ガンガーの畔で舟に乗ろうとする。そのとき舟人の幸運を祝って、神々が花を降らせる。

舟人はラーマへの愛に溢れる ラーマの御足を川の水で洗う。

神々は舟人に花を降らす ラーマらを舟に乗せる幸運を得ると。

(II-101; 4)

- (7) 自分の留守中に母カイケーイーが兄ラーマを森に追いやったと知ったバラタは、「兄ラーマは国を治めてください」と懇請するために森に行った。バラタの兄思いの気持ちを嘉（よみ）するために神々が花を降りかける：

バラタが歩むと神々が花を降らせ 樹木は花と実を成らせる。

鹿はバラタを見つめ小鳥が歌う 皆がラーマ思いのバラタに仕う。

(II-311; 4)

- (8) 「愛でいっぱいラーマは バラタの言と心と行いを描く」(II-321; 3の一行目)と述べて(7)の確認をした直後に、『ラーマの行いの湖』で神々は愛に感動してラーマに花を降らせたと言っている：

ラーマのさまを見て神々は 花の雨を降りかける。

(II-321; 4の一行目)

- (9) ラーマは妃スーターを火の神に委ねる。眼前に残った妃は幻影なのでラーマの真の妃は汚されない。ラーマはほかにも善行をなしているのです、神々に花で祝福される。

神々はたくさん花を降らせ、ラーマを讃える歌を詠う、

自らを悪魔に拝ませるほどに、情が深きラーマなり。(III-27)

- (11) ラーマが羅刹らを退治すると決意した場面で、神々はその決意を誉めて花を降らせる：

攻撃を遅らせる理由はなし 猿の軍勢にラーマは命令されよ。



羅刹らを退治するとの志に 神々は花を降らせ神界に戻る。

(V-34; 4)

- (13) ラーマは妃のスイーターを火神に委ねた（前述の第Ⅲ編の「森林編」を参照）。この「ランカー編」では、救出されたスイーターが火神の手からラーマに戻されたことを祝して神々が花を天から降らす：

**神々は喜び花を降らせ、空で太鼓を撃ち鳴らす、**

**楽士たちが詠う、神女（神の妻）が天の船で舞う。**（VI-109 ka）

ここで神々から花を降らされたのは、火神に妃スイーターを委ねたラーマ、火神の懐に入ったスイーター妃、それに災悪からみなを護る火神であろう。

- (14) ラーヴァナを成敗したラーマは、天の船に乗った神々が降らす花で祝われる：

**見事な船に乗りし神々は、花を降らせその場を去る、**

**好機が来たとシヴァ神は、ラーマに近寄りかくいえり。**

(VI-114 ka)

- (15) アヨーディヤーの都に立派な船に乗って凱旋したラーマ一行は、空から神が降らすらしい花を受けて、都の人々の大歓迎を受ける。

**空から花が降りそそぐなか、喜びに満ちてラーマが館に向かう、**

**都の男女は家の高さ階から、そのさまをじっと見つめる。**

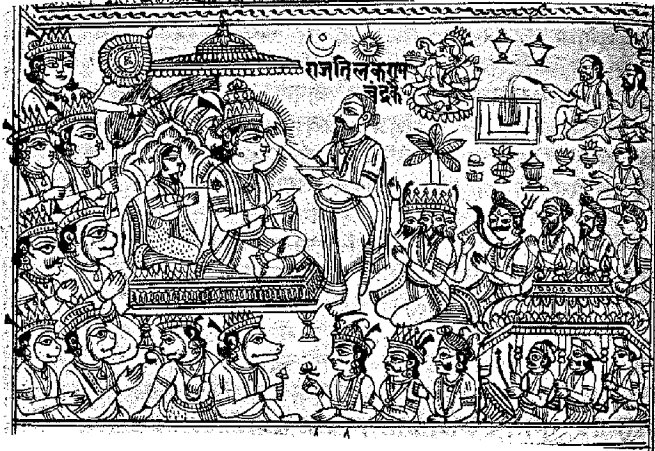
(VII-8 kha)

- (16) もう一つはチャウパーイーで、神々がラーマを含めたアワドの都の人々を祝福して花を降らせる。

アワドの都は美しく飾られ 神々は花をたくさん降らせる。

ラーマは従者を呼び言いつける まずは朋を沐浴させよと。

(VIII-11; 1)



図版 傘蓋のしたにラーマと妃のスイーターが座し、家祭僧が戴冠式を行う。(出所：石板刷り『ラーマの行いの湖』=縦29センチ横24センチ=の第Ⅶ編「後編」で、場面(16)=Ⅷ-11;1の直後に描かれた絵。ここでは絵のうえとしたを切って捨て、中央部の三分の一ほどを載せた。)

## B. 神々・半神・聖仙らが花を降らせる場面

上の「神々だけが花を降らせる場面」において、(1)、(2)、(3)、(10)、(12)の五つが欠けている。欠けているのは「神々だけが花を降せる」事例でなく、「神々に加わったほかの者が花を降らせる」か「人間が花を降らせる」場面である。

以下に、神々に半神や聖仙らが加わった事例を挙げる。

- (1) ラーマら四王子の誕生を祝って、**神に加えて人面蛇身の半神ナーガ**と人の**聖仙**も花を降らせて王子らとその母らをこう祝う：  
美しき掌から花を降らせる 空で太鼓の音が鳴りひびく。  
ナーガと聖仙と神が祝う 各人の仕方で。(I-191; 4)
- (3) ラーマ王子が弓取り式で勝利してスイーター姫と結婚することを祝福し、**創造神ら・行者ら・聖仙ら**が花を降らす：

創造神と行者と聖仙がラーマを讃えて祝う。

色とりどりの花と花環を降らせ 楽士らが祝い歌を詠う。 (I-262; 3)

- (10) **ラーマが猿王スグリーヴァに花の環 (sumana kai māla) をかける**：  
ラーマはスグリーヴァに花の輪をかけ かれに大きな力を与う。  
(IV-8; 4の一行目)

ここで**ヴィシュヌ神の化身**（この世に人間として降誕したラーマ）が猿王スグリーヴァに花の輪をかけるのは、神としてごく自然な行為であろう（Ⅱの(1)を参照）。したがってこの場面(10)は、「A. 神々だけが花を降らせる場面」に含めてもよかったかも知れない。

- (12) **羅刹ラーヴァナを成敗したのを讃えて、神々と聖仙らがラーマとヴィシュヌ神に花を降らせる**：

花を降らす神々と聖仙が 栄光あれとラーマとヴィシュヌ神。

(VI-103; 6)

これら(1), (3), (10), (12)の四つの場面では、花を降らせる神々に「半神ナーガ」「人の聖仙」「人の行者」も加わった場合もある。

### C. 人間が花を降らせる場面

人間が花を降らせる事例は、この作品で下記の一つだけである。

- (2) **ラーマ王子らが誕生してから何年か経って、師のヴィシュヴァーミトラ仙が儀礼を執行するのを扶けるべく、師に導かれてラーマとラクシュマナの二王子が道を行く。その二人に女性が花を降らせて祝う。**

美しい顔と眼の女性ら sulocani は喜び、花を降らせくる、

王子兄弟が行く先々で、このうえのない喜びが湧く。 (I-223)

ここでは人間の女性らが、ラーマとラクシュマナに花を降らせている。これは、師のために尽すラーマらに感動した女性たちの心を示している。

以上で、「A. 神々だけが花を降らせる場面」、「B. 神々・半神・聖仙らが花を降らせる場面」、「C. 人間が花を降らせる場面」について、(1)から(16)の事例を見てきた。

それらで花が降り注がれる場面や動機・目的は、神々や人々が感動して「人々および人々のために活躍する動物を祝福するため」であった。そのことには、神々だけが花を降らせる場面(4)から(11)および(13)から(16)、神々とともに人間も花を降らせる場面(1)、(3)、(10)、(12)、人間だけが花を降らせる場面(2)のどれを取っても、例外がない。それらではみな、感動した神々や人々が善きことをした人たちに祝福するために、花を降らせているのである。

そのことを語る格好の例に、場面(3)がある。そこではラーマ王子が弓取り式の場で勝利して、スィーター姫と結婚するのを**祝福し、創造神ら・行者ら・聖仙ら**がいっしょになって、花を降らせているのである：

創造神と行者と聖仙がラーマを讃えて祝う。

色とりどりの花と花環を降らせ 楽士らが祝い歌を詠う。

(I-262; 3)

場面(10)では、**ラーマ王子が猿王スグリーヴァを力づけるため花環をかける**。この作品でのラーマはヴィシュヌ神の化身として生れているので、「ラーマの姿をした神が、猿王スグリーヴァに花環をかけた」と受けとれる。

ラーマはスグリーヴァに花の輪をかけ かれに大きな**力**を与う。

(IV-8; 4)

なお猿王スグリーヴァ配下の猿軍は、ランカー島に攻め入るラーマを支

えるので「人々のために活躍する動物」といえよう。

人間の女性らも花を降らせることで、ときに神々と同格になる。その例が(2)の場面で、師に導かれてラーマとラクシュマナの王子が行くのを、女性らが花を降らせてこう祝う：

**美しい顔と目の女性らは喜び、花を降らせくる、**

**王子兄弟が行く先々で、このうえのない喜びが湧く。** (I-223)

このように代表的な場面を見てきて、感動した神々や人々が「人々と人々のために活躍する動物を祝福する」ために花を降らせていることが明らかになった。

#### IV どのような花を どのような神が降らせたのか

これまでの考察により、誰により どのような場面や動機・目的で 誰に対して花が降らされたのかが、およそわかってきた。すなわち主として神々が、ときに人々が神々に加わり、またごく稀に人々だけで、よい行為をした人々を祝福して花を降らせ、あるいは花でできた輪飾りを胸にかけるのである。

この章では、A. どのような花が降ってきたのか、B. どのような神々が花を降らせたのかを考察する。

##### A. どのような花が降ってきたのか

この作品で花について記述がなされているのは、Ⅲ章のA.の「神々だけが花を降らせる場面」にある(5)であろう。

土の埃で空は暗い まるで雨期に雲が空を覆えるがごとく。

神々は如意樹 surataru の花を降らす 風に吹かれた鶴のように。

(I-347; 1)

この句に詠われている如意樹は天の樹・神の樹を指し、あらゆる望みを

叶えてくれる樹とされるが、それに咲く花の色や形を作品は示していない。surataruがこのラーマ物語で12か所に現れるが、そのどれにも花の色や形が示されていないのである。また石板刷りの『ラーマの行いの湖』の絵で如意樹が出てくるあたりの十個所くらいを見ても、如意樹やそれから降る花は全く描かれていない。

そこで北インドのヴリンドーヴァンで寺院と学問所を運営する旧知の学僧シュリーワツァ・ゴースワミー師に問いあわせたところ、こういうご教示をいただいた。

“Gods shower the flowers from kalpavriksh, the wish fulfilling tree in heaven. Further details are not available, except that the tree can bear any flower and fruit.”

(筆者による大意訳)「神々が人間のあらゆる望みを叶える如意樹の花を天から降らせる。樹はどのような花や実もつけられるが、詳細はわからない。」

なおゴースワミー師が書かれた kalpavriksh (望みを叶える樹) は、『ラーマの行いの湖』に出てくる surataru (神の樹) の同意語である。

このような事情でゴースワミー師の教示を得ても、降らされる花がどのような形や色をしているのかわからない。北インドのヒンドゥー教徒は、神々や優れた人々が降らす花が、何の樹のどういうものなのかが気にならないのだろうか。人々を祝福するために美しい花が、天から降ってくる。それで十分なのだろうか。

## B. どのような神々が花を降らせたのか

神または神々についても、『ラーマの行いの湖』にはなんの説明・記述もない。

多くのヒンドゥー教徒は、ブラフマー神、ヴィシュヌ神、シヴァ神の三

神を崇拜している（前田専学「ヒンドゥー教」（辛島昇 他編『新版 南アジアを知る事典』（平凡社、2012年刊）pp. 670-679。それらの神々の役割などを下に記す：

- ・ブラフマー神。宇宙の最高原理で、創造を担う神。ハンサ（鶯鳥）を乗り物とする。配偶神は智の女神サラスワティー（弁才天）。
- ・ヴィシュヌ神。維持を担う神で、ガルダ（鶯の一種）を乗り物とする。ラーマ、クリシュナ、ブッダ（仏陀）などはその化身とされる。配偶神は富の女神ラクシュミー。
- ・シヴァ神。破壊を担う神で、パールヴァティー（「山から生れた」）女神を配偶神とする。象頭人身のガネーシャ神は、シヴァ神とパールヴァティー女神の子とされる。

ここで神とその個別の名を示す語句を、本稿の第I章で行ったのと同じ方法で示す。すなわち既刊の日本語辞典と『ラーマの行いの湖』に現われる語句がCallewaertら編の『ラーマの行いの湖 語彙索引』にどのくらい載せられているのを見るのである。

- ・神。bhagavāna, bhagavānā が『語彙索引』に40。  
īsa, īsā, īsu, īsvara が『語彙索引』に38。  
prabhu が『語彙索引』に600くらい。
- ・ブラフマー神。brahmā 関連語句が『語彙索引』に20くらい。
- ・ヴィシュヌ神。viṣṇu と viṣṇubhagata が『語彙索引』に24。なおその化身でこの物語の主人公ラーマ（rāma）が1,000以上。
- ・シヴァ神。siva, sivā 関連語句が、このラーマ物語の最初の語り手とされているのを含め（I-15; 4）、『語彙索引』に100くらい。

「神」の意の bhagavāna と īsa の語の用法を作品で見ると、前者はシヴァ神の意で、後者はヴィシュヌ神の化身ラーマの意で用いられていることが多い。また多くの場面で出てくる prabhu という語は、本来「主」や「神」を指すが、『ラーマの行いの湖』ではラーマを示していることが多

い。ラーマが神ヴィシュヌの化身としてこの世に降誕したという思想が、この作品の全編に及んでいるのだろう。

つぎに個別の神に関する語句の用法を検討する。

まずブラフマー神 (brahmā) は「宇宙の最高原理 (I-73; 2)」だが、その神をラーマが産みだしたと詠われていることが多い (I-150; 3)。

このラーマ物語におけるヴィシュヌ神 (viṣṇu, viṣṇubhagata) など神々の役割は、「シヴァ神の貞節な妻サティーは見る シヴァ神とヴィシュヌ神とインドラ神らの神々を。無限の力を持つ神々が ラーマの御足を拝するを。(I-54; 4)」に現われている。そこでの神々は、ラーマに仕える身であることをサティーが見ているわけである。また「苦行をなしてブラフマー神が世界を創造し 苦行でヴィシュヌ神が世界を護る。苦行でシヴァ神が世界を破壊し 苦行で半神のナーガが世界の重みを支う (I-73; 2)」の句のように、神々それぞれの役割を詠うものもある。

ヴィシュヌ神の化身ラーマは、I-52; 4 やⅦ-119; 2 のようにその名を唱えるだけで人が幸いになるともされている。

シヴァ神はつぎのように、この『ラーマの行いの湖』で最初の語り手とされている：

シヴァ神はトゥルスィーを嘉し ラーマの行を歓喜と吉兆の物語に。

シヴァ神と妃のお慈悲で ラーマの行をわれトゥルスィーは描く。

(I-15; 4)

またシヴァ神はラーマの信者であり (Ⅱ-4; 2, V-47)、大きな力を持つ神である (Ⅵ-2) ともされている。

神々はこのように大きな力を持つとラーマ物語に詠われているが、神々の力はラーマのために使われる、換言すれば神々はラーマに仕える存在である。

ところで花が降る場面では、花の雨に祝福される者が描かれている。しかし花が降るさまは、石板刷りの本の多数の絵のどこも描かれていない。



また頻繁に詠われる神々の姿も、絵のどこにも描かれていない。

花も神々もヒンドゥー教徒にとっては、分かりきっていて描くまでもないのだろうか。あるいは神々という天の存在やそれが降らせた尊い花は、描いてはいけないものなのだろうか。

## V 本稿の成果と今後の課題

本稿では、トゥルスィーダースが16世紀に詠ったラーマ物語り *Rām-caritmānas* (『ラーマの行いの湖』) のなかで、誰がどのようなときに誰に「花」を降らせたかの代表的な例を示し、考察した。

それらの代表的な例としては、下記の第Ⅶ編の「後編」にある8のkhaのチャンドが挙げられる。これは、羅刹ラーヴァナを亡ぼしてランカーから都に凱旋したラーマが城（館）に向い、また神々が空から花をかけラーマを祝う場面であ

**空から花が降りそそぐなか、喜びに満ちてラーマが城に向かう、  
都の男女は家の高さ階から、そのさまをじっと見つめおる。**

(Ⅶ-8 kha)

ここで空から神々が花を降らせ、凱旋したラーマを祝福しているのである。このように本稿は、花が降らされる場面の代表例16を作品により示しえた。

しかし花の種類や色と形、花を降らせることの多い神々の姿は、『ラーマの行いの湖』に示されていない。筆者は16世紀以降のほかの作品によって、その原因を確かめたい。神々の降らす花がありがたいと思うラーマの信徒には、花や神々を描写するのが勿体ないのだろうか。あるいは『ラーマの行いの湖』のほかの中世の文学作品には、花の形や神々の姿が示されているのだろうか。そのことを多くのヒンディー文学の研究者に訊ね、筆者自身がほかの中世作品にあたるのが、今後の課題となろう。

参考文献

テキスト：Poddār, Hanumān Prasād (ed.). *Śrīrāmcaritmānas* (『ラーマの行いの湖』), Gorakhpur: Gītā Press, 1961.

上掲テキストの語彙索引：Callewaert, W.M. & P. Lutgendorf, *Rāmcaritmānas Word Index* (『ラーマの行いの湖 語彙索引』), New Delhi: Manohar Publishers and Distributors, 1997.

ヒンドゥー教について：前田専学「ヒンドゥー教」(辛島昇 他編『新版 南アジアを知る事典』(平凡社, 2012 年刊) pp. 670-679。

(原稿受付 2020 年 4 月 16 日)